

## 最後のメヌ・ド・ビラン

——『人間学新論』と精神的生をめぐって——

メヌ・ド・ビラン研究（IV）

藤 江 泰 男\*

Dernière philosophie de Maine de Biran

Yasuo FUJIE

フランス革命からナポレオンの帝政時代、さらには王政復古の時代を、近衛兵として、あるいは行政官として、あるいはまた国会議員として公的生活を送った哲学者、当時も今もその全貌が判然としない哲学者メヌ・ド・ビラン（1766-1824）の哲学について、その思想的変遷について、われわれはすでに三回にわたり論及してきた。今回はその仕上げとして、晩年のメヌ・ド・ビランの思想的立場、最後に到達した哲学的境地を論述したいと思う。すなわち、ビランの哲学いわゆるビラニズムの最終段階について述べるのが、今回の論究の眼目である。

初回の論考<sup>1)</sup>で概説したように、ビラニズムには三つの展開があり、その成立以前と併せると、ビランの哲学的思索は四つの時期に区切ることが出来る。つまり、1) 前ビラニズムの段階、すなわち自己の哲学的立場を確立するまでの惑いの時期を、まず指摘できる。1804年以前のビランの思索のことである。2) これに続き『思惟の分解』や『直接的覚知』という著作（アカデミーへの応募論考）によって代表されるビラニズムの第一段階（1804-1812:「努力の心理学」の段階）、3) 続いて、ビラニズムの第二段階（1813-1818:「原理の哲学」の段階）、4) 最後に、ビラニズムの第三段階つまりは最終段階（1818-1824:「精神的生」の段階）が来る。もちろん、ビラニズムについては「努力の心理学」の段階のみを認め、それ以後はポスト・ビラニズムとして整理するやり方、プレ・ビラニズム、ビラニズム、ポスト・ビラニズムの三区分という処理の仕方でも可能である<sup>2)</sup>。そのポ

1) 「ビラニズムの成立と変容をめぐって——メヌ・ド・ビラン研究(I)」(『梶山女学園大学研究論集』第32号, 人文科学篇, 2001.3)

2) 増永洋三氏の紹介に拠れば, E. ナヴィルは「感覚の哲学」(1794-1804)「意志の哲学」(1804-1818)「宗教の哲学」(1818-1824)という三区分を提起している, とのことである。第一段階と第二段階のビラニズムが一体に見られているわけである。『人間学新論』の邦訳(晃洋書房, 2001)の氏による解説部分, p. 230, あるいは, 「メヌ・ド・ビラン研究覚書」(『メヌ・ド・ビラン研究 I』194.7) p. 16参照。

\* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

スト・ビラニズムの中を二つに小分けすれば<sup>3)</sup>、その主張は上のものと異ならない。

今回のわれわれの論考は、この最終段階のビラニズム、「精神的生」というキーワードによって括られるメヌ・ド・ビランの最終段階の思索についての検討をその眼目とする。この最終段階という表現は、しかし、その思索がメヌ・ド・ビラン自身にとって最後のもの、決定的立場であったとまで主張するものではない。メヌ・ド・ビランの生涯がその時点で閉じてしまったというだけである。最後のビラニズムは、なるほど宗教的雰囲気をもたない思索ではあるが、晩年の澄明な思索、最終的な到達点として、つまり「努力の心理学」の完成態として語るべきではないであろう。ビラニズム全体を特徴づけるある種の逡巡（あるいは優柔不断）が、この時点でも相変わらず認められる、とあらかじめ指摘しておこう。

さて、本論に入る前に、最終段階のビラニズムの核心部分を表現する「精神的生（あるいは精神の生：la vie de l'esprit）」について、その問題の所在を簡略にまとめておこう。すでに論究済みのところとどう関わり、どう異なっているかを、つまり、何が問題の核心であるかを、本論での展開に先立ってあらかじめ粗描しておきたい。というのも、本論にて詳しく検討したいと思っている最終段階のビラニズムを代表する著作『人間学新論』には、編集上の問題が多々あり、必ずしもビラン自身の最後の思索を全体として忠実に反映するものとはなっていないからである<sup>4)</sup>。

先にも触れたように、ビラン自身、1818年あたりから、あらたな思想的展開を見せたことはよく知られたところである。つまり、『人間学新論』の序論<sup>5)</sup>にも認められるように、最終的には新たな人間学（「人間の科学」）を準備することになるある種の宗教的展開（conversion）を見せたということは、ビラン研究者にとって言わば常識である。それは、心理学的人間論から実体の観念への反省的復帰の時期を経た後、ビランに到来した新たな観点であり、それを通して人間をその全体において捉え表現しようとする学問<sup>6)</sup>を目指すことになる。それを「人間学（anthropologie）」という術語で語り始め、最終的には『人間学新論（Nouveaux Essais d'Anthropologie）』の表題で世に出るはずのものであった。最新のアズヴィ版の表題では、さらに「内的人間の科学（la science de l'homme intérieur）」について」という副題も添えられている。1823年あたりから集中的に執筆され、彼の死によって中断することになるこの未刊の著作は、その内容からして、新たな項目を含むはずであった。それが「精神的生」の項目なのである。つまり、人間の全体的構成について、従来展開してきた心理学的的自我、それを支える身体的機能、つまりは動物的功能・組織に

3) たとえば、ペグー『メヌ・ド・ビラン 内的生活』（Payot et Rivages, 1995）、p. 19。大枠でグイエの着想（Cf. Les conversions de Maine de Biran, J. Vrin, 1948, p. 308-09）に倣い、三区区分する。1813年以降をポスト・ビラニズムの時期とし、そのうちを「絶対の哲学」と「精神的生」との二つの時期に分ける。

アズヴィ版『人間学新論』の校訂者バエルチは、便宜上と断りつつ「心理学的段階（1812年まで）」「形而上学的段階（1818年まで）」「神学的段階」と、ビラニズムを三段階に区分している（『メヌ・ド・ビラン全集 X-2』J. Vrin, 1989, pp. IX-XIII）。

4) この点については、増永氏の前掲「論考」ないし「解説」に、詳しい説明がすでにある。

5) 当該箇所は日記1823.10.23からの長い抜粋である。ナヴィル刊行の『未刊行著作集』で始めて『人間学新論』として使用されたもの。ティスラン版でも踏襲され、アズヴィ版でもこの箇所については踏襲されている。Cf., *Maine de Biran Journal*, II, p. 398, note 3.

6) 「全体的人間」の学のことだが、後で論及する。

加えて、もう一つの次元、もう一つの観点が、ビランの人間理解に付加されて公刊されるはずであった。しかしそれはビランの死により、完成せずに残されることになる。原稿の下書きの役割も兼ねていた晩年の日記の記述は、この領域についてしばしば言及しており、ナヴィル版の著作集では、それが『人間学新論』の内容を構成する形で編集されることになる。予告されながら未刊のままに残された「精神的生」の部分を、日記の対応箇所を補うという編集方針をナヴィルは採ったのである。

さて、その「精神的生」、『人間学新論』で始めて打ち出されるはずであった「精神的生」とは、彼の死によって最終的表現（原稿段階）にまで整理されることのなかった「精神的生」とは、「動物的生」「人間的生」とともに、人間のあり方を語るためのキーワードをなすものである。この段階以前のメヌ・ド・ビランは、もっぱら「動物的生」と「人間的生」つまり、生理学の人間の条件と心理学の人間のあり方との関係を軸に据えて人間を見てきた。その関心の中で、それまでの諸論考が成立していたわけであり、従来の物理学的・生理学の人間理解に抗して、あるいは論理学的人間理解に抗して、新たに心理学的視点を、それも生理学の最新の学問的成果に支えられた新たな心理学的視点を確立すべく、理論的に悪戦苦闘してきた。その新たな視点を、惑いの時期から彼が馴染んでいた導きの糸、イデオロギーの視点を超えて展開できた時、彼は始めてビラニストとなるのである。

たとえば、グイエの整理するところを借用すれば、このように説明できるかと思う。つまり、1.「動物的生」とは、生理学的反応のレベルで説明できる生のあり方、「感覚や情念、欲求、本能、……体感<sup>7)</sup>」といったもので説明できる「受動的生」のことである。このレベル、この次元での人間はまったく動物と異ならない。2.「人間的生」、この生のレベルで人間ははじめて固有の人間となる。それは自我の出現の段階であり、それが努力感という直接的感覚を介して二元的に、つまり「抵抗」と「努力」の二項関係として提示されるのが、ビランの自我論の基礎であった。精神のみでも、身体のみでも説明できず、はじめから両者の関係において人間を定義しようという試みである<sup>8)</sup>。意志や意欲との関係で自我つまり人間が定義され分析されており、実体論的自我とも、生理学的的自我とも異なり、両者の関係の直接性のうちに人間の本来的ないしは原初的あり方を認める。この点については、先行する三つの論考においてわれわれはすでに論究している。

こうした二つの生のあり方、すでに提示され、ある種周知のものでもあった生の二つのあり方に加えて3.「第三の生」すなわち「精神的生」（ないし「精神の生」）が、新たに『人間学新論』のうちで体系的に展開されるはずであった。その「精神的生」とは、何よりも「特権的な瞬間に対応する生、……恍惚や靈感、啓示といった用語を使わざるをえない特権的な瞬間に対応する生のことである<sup>9)</sup>」。この生も受動的生のあり方として特徴づけられるが、もちろん第一の生、つまり「動物的生」の受動性とは異なり、いわば上からの作用、霊的作用に反応する受動的生のことである。生理的ないし生命的な受動性を生き

7) H. Gouhier, *Maine de Biran par lui-même* (Seuil, 1979) pp. 141-142; 邦訳、グイエ『メヌ・ド・ビラン』（サイエンティスト社、1999）pp. 167-169.

8) 「自我、意識、意志は人間学に関する一種の三位一体、器質的変容の超器質的原因として指定される三位一体をなしている」(Ibid., p. 142; 邦訳, p. 168)

9) Ibid., p. 142; 邦訳, pp. 168-69.

る「動物的生」、上位の作用のへの受動性を生きる「精神的生」、二つの受動性が「人間的生」の能動性を挟む形で位置づけられ、構造化されたのである。

それでは、『人間学新論』のテキスト内容の分析に移ろう。そこで何が展開され、あるいは展開を予告され、そして何が実現しなかったかを、テキストに即して検討したいと思う。

## I. 『人間学新論』をめぐる

### I-1. 『人間学新論』の構想と第三の生（緒言と序論から）

最後のまとまった著作『人間学新論』(*Nouveaux Essais d'Anthropologie*)に至るメーヌ・ド・ビランの思索の変遷について序論で見えてきたが、ここでは、この著作の構想として語られるビラン晩年の志向を、テキスト内容の検討に加えて、その編集方針の中にも辿りたいと思う。膨大に書き続けながらも、ほとんど公刊することのなかった哲学者ビランの最後の思い（と惑い）を、ここに定着しておきたいと思うからである。この段階でもまた、ビラン念願の著作は完成に至らず、未完のまま、草稿や日記の形で後世に残されることになる。それが本人の死によって結果的に打ち切られた、という点で以前と異なるだけである。

まず、本書の構成であるが、すでに言及したところから明らかなように、三つの内容で構成されることになっていた<sup>10)</sup>。つまり、「動物的生」、「人間的生」、「精神的生」の三つの生のあり方をめぐって展開されると、ビラン自身その構想を語っていたものである。それは今回出版されたアズヴィ版の『人間学新論』でも維持されている。つまり、日記に書きつけられたその構想は、本書の序論を構成するものとして、アズヴィ版の校訂者パエルチによっても、先行する校訂者たちと同様に維持されている。端的に言えば、先行する校訂者（エルネスト・ナヴィルとアンリ・グイエ）の編集方針が、この序論では概ね踏襲されているのである<sup>11)</sup>。

さて、問題は、この論究対象をなす一つの領域、それも『人間学新論』において始めて体系的に提示されるはずであった「精神的生」の部分が、アズヴィ版ではすべて削除されてしまったということにある。ティスラン版、それに先立つナヴィル版のテキストでも、『人間学新論』という著作は、この「精神的生」、つまり第三の生の部分がその核心部分をなす。それに先立つ二つの生については、すでに他の著作でも存分に言及していたからである。そうした核心部分を記述していた原稿が、アズヴィ版では、第三部を構成するものとしてはすべて削除されてしまった。つまり、第三部が存在しないのである。したがって「精神的生」の内容については、他の著作や覚書きを参照するか、日記の当該箇所を直接参照するかしか手が無くなったということである。わずかに付録として部分的に収録されたテキストだけでは、その統一的内容を推測するのは困難であろう。「動物的生」や「人

10) 前掲『メーヌ・ド・ビラン全集 X-2』p. 25; 邦訳, pp. 21-22.

11) 『人間学新論』の編集上の問題について詳しく論究することは、ここでは差し控えたい。パエルチがその解説部分で明快に述べているし、それに論及した増永氏の論考もすでにあるからである。ここでは、拙稿に関わる限りで編集上の問題を扱うのみである。その他、ビランの著作刊行にまつわる様々のトラブルについては、前掲の H. グイエ、『メーヌ・ド・ビラン』第1章「果てしなく続く草稿の来歴」で歴史的に詳しく説明されている。

間的生」についての記述部分は、ティスラン版よりさらにテキストを付加して充実しているが、肝心の「精神的生」については、それに先行する二つの生の記述から類推するしかない。もちろんこれは、校訂者の「可能な限り忠実に草稿を再現する<sup>12)</sup>」という方針に沿ったものである。「ナヴィルの取り去ったものを再度取り入れ、彼が付加したものを削除した<sup>13)</sup>」とバエルチはその解説部分で、『人間学新論』の今回の編集方針について述べている。

それでは、人間学 (l'anthropologie) ないし人間の科学 (la science de l'homme) の全体的構想も含めてビランの本書執筆の動機や意図について、緒論および序論部分を検討しながら考えてみよう。

### 1-1. 「緒言」から

本著作の意図について、「緒言 (Avant-Propos)」の冒頭でメヌ・ド・ビランはこう述べている。

この『人間学新論』という表題によって、私は単に人間の一部或いは一側面ではなく、人間全体 (tout l'homme) を考察したいと思っている、ということを示そうとした<sup>14)</sup>。

この件に続き、ビランはさらに「内的人間 (homme intérieur)」というタームで、自身の意図をより明確にしようとする。

もし私が最初の意図に従って心理学という表題を選んだとしても、それは生理学という表題同様、私の目標をうまく表しはしないであろう、と私は感じていたのである。なぜなら、私の著作は、人間について、そして特に内的人間について、自らを自我という同一的な永続的な主体と、驚くべき多様性をもって変化し過ぎ去り相継起する有機的な或いは知的なすべての次元の諸感覚・諸観念・諸機能或いは諸作用との間に、意識によって打ち立てられた諸関係において考察される内的人間について、論じなければならないのであるから<sup>15)</sup>。

以上の引用箇所からも分かる通り、「生理学」によっても「心理学」によっても、ビランの本書執筆の意図を端的に表現することはできない、つまり、生理学も心理学もその部分的表現に過ぎないような「全体としての人間」について、すなわち「全体的人間」についてここでは語りたい、とビランはまず書き出している。それがまた、「内的人間」というタームによって、より限定された形で提示されている。

12) 前掲『メヌ・ド・ビラン全集 X-2』p. XXIV (解説部分)

13) *Ibid.*

14) *Maine de Biran, Œuvres, Tomes X-2, "Nouveaux Essais d'Anthropologie ou de la Science de l'Homme Intérieur"* p. 1; 邦訳, p. iii. 『人間学新論』の訳文は、前註で触れた増永洋三氏 (晃洋書房, 2001年) の文章を参考にさせていただいた。展開の必要上、ときに表現を修正したりフランス語を挿入したりした箇所があることを、あらかじめお断りしておく。

15) *Ibid.*



こうした全体的視点からの人間（学）が生理学的身体とどう異なり、どこで重なるかについては、まず大枠において指摘される。生理学的条件と人間たる私（自我）との「区別されるが分離されない」独特の関係についてピランはこう述べている。

自我、つまり人間がこのような複雑な諸器官とは異なるにしる、彼は人間のままであり続けながら、かかる複雑な諸器官から自らを引き離すことはできないであろう。人間は、ある哲学者がいみじくも語ったように、それ故、然々の魂ではなく、然々の有機体でもなく、然々の身体に結ばれた然々の魂なのである。人間学はこの絆をあるがままに捉える。人間学は事実を、意識の或る現存の事実を根拠とするのであって、抽象的な原理を根拠とするのではない<sup>16)</sup>。

生理学的器官は、生存の条件として人間を支えつつも、人間からは（自我からは）やはり区別される（分離はできないが区別される）。その意味でも、具体的で個別的な人間、心身結合の絆のうちに感じられ把握される具体的な人間、つまり「然々の人間、然々の私」を解明しようと、その意図を語っている。

事実に基づく、現存の事実に基づく具体的な人間学、具体的な絆のなかで体験される人間の実像を解明する学問をここに表明していることが見て取れる。

こうした企図に支えられた人間学が、現存（existence: 実存）の内的意識に基づく形で展開されるだろうということ、そのことが、原初的事実、内的眼差し、反省的意識といった独特の術語を伴って読者に予告ないし警告されるというのが、この「緒言」の内容である。

## 1-2. 「序論 (introduction)」から

この序論は三部構成で論述される。A) まず人間存在の孕む二つの生あり方についての略述、B) それに絡んでの先行する諸論考を振り返る部分（三つのアカデミーに応募した4つの論考に関して、その核心的論点を回顧的に論及する部分。これが量的には序論の中心をなす）、C) 最後に「まとめ」ないしは本論への繋ぎの段落が来る、といった三部構成である。

### A) 人間における二つの生について

そのうちで二つの本性を結合している人間は、また二種の法則に関与する。有機的な身体的存在としては、感覚し受け取った諸印象の必然的系列によって動かされる動物として、人間は自分の生を知ることなく生きるのである。「彼八生キテイルガ、彼自身ノ生ソノモノヲ知ッテハイナイ<sup>17)</sup>」。

こうした身体としての人間、自覚することも（知ることも）なく、いわば必然的に営ま

16) *Ibid.*, pp. 1-2; 邦訳, p. iv.

17) *Ibid.*, p. 6; 邦訳, p. 2. ちなみに、引用文の最後に来ている、著者自身によるラテン文の引用はオヴディウスからのもの。

れる生としての「動物的生」ないし「感覚的存在」に加えて、「全体的人間」としては、さらにもう一つの生を生きている。

実際、人間が、全ての他の主体的存在から、そして客体として感じられ或いは表象され得る全てのものの存在から、区別され分離された固有の現存を有することによって、彼を自我・人格として構成する意識の或いは関係の第二の生をはじめから賦与されているのは、単に動くもの（mobile：可動的なもの）としてではなく、自由なそして本来的に発動的な（moteur：運動的な）行為者としてである<sup>18)</sup>。

人間は、その全体的なあり方として、動物的生つまり感覚的生のあり方を身にまとうとともに、それに条件づけられながらも還元されはしない自由意志をもつということ、つまり、稼働的ないし運動的なあり方をはじめから賦与されているということを、ここでピランは語っている。身体的な感覚的生、動物的生に加えて、あるいは、そうした生のただ中で、さらに稼働的生で運動的、自由に基づく生を生きている、というのが人間の全体的なあり方である、と語っているわけである。しかも、この第二の生によってこそ、人間的生が、人間にふさわしい生が成立している、と言えるのである。第一の感覚的生のみではいまだ動物との区別はなく、この第二の生を生きる時、自由に基づき運動を開始する主体となる時、そしてそうした運動が自覚される時、はじめて人は、人間としての生を生きている、とピランは考える。

この第二の生とともに有機体の闇のうちに輝くような光が生まれる。その時からその真の資格において人間が存在し始める<sup>19)</sup>。

上の引用文に続く件で、「区別されるが分離されない」二つの生の微妙なる関係について、ピランはこう描写している。

（……）そして人間におけるこの存在（こうした人間存在と）は、単に動物的生であるだけではない。彼は感覚を有し或いは感じるのみではなく、自らが感じることを彼は知るのである。（……）<sup>20)</sup>

単に感覚するだけではなく、その感覚を自覚するとき、つまりそれが同時に知られるとき、本来的な人間存在が成立し始める、と語るのである。このように第一の生との関わりのなかで、それとの距離の取り方次第で人間の誕生が測られることになる。

さらに続く文章で、ピランは、この二つの生の関係の問題を軸にして、自身の主要論考の歴史を振り返っている。それが、量的にもこの序論の大部分を構成することになる。「人間的生」とは何か、「自我」の感覚（sentiment）〔感情〕とは何か、という問いの重要性を、そうした論考を回顧することで応えようとする。

---

18) *Ibid.*, p. 7; 邦訳, p. 3.

19) *Ibid.*, p. 7; 邦訳, p. 3.

20) *Ibid.*

人間のこの生は何から成り立ち、それを動物的生から正確に区別するものは何であろうか。外部から受け取られる全ての感覚から、外来の全ての変容から区別され、それらが過ぎ去っても同一のままにとどまるこの自我の感覚とはどのようなものであろうか(……)<sup>21)</sup>。

すべてが変動する動物的生のただ中であって、いつも変わらない自我の感覚は何に由来するのか、という人間存在の核心部分への問いかけである。ビランの諸論考は、この核心的疑問への、それぞれに固有の限定を伴った回答であった、と言うべきであろうか。いずれにしろ、こうした疑問を確認した後、自身のアカデミーへの応募論考の主旨が語られることになる。

B) 4つの主要論考についての回顧的紹介から<sup>22)</sup>

(1)

1802年の受賞論考については、習慣の二つの異なる影響についての究明がその核心をなす。つまり、繰り返されるごとに曖昧になり順次消えていく習慣的知覚と、逆に反復に比例してより明晰により確実になる習慣的行為という二つの異なる習慣の効果があるということ。この効果の違いが何に由来するかが当論考の眼目である。魂の能動性、つまり、単なる受動的反復ではなく意識的・自覚的な反復であるかどうか、習慣の形成に意識の能動性が関与しているかどうかということに、こうした習慣的效果の差異は起因するという着想を語るのが、この論考の趣旨である。

(……) 習慣、或いは外部から受け取られる同一の諸印象の反復は、これらの印象のうちにある厳密な意味での感覚的(sensible: 可感的)な全てのものを、すなわち最初に魂に快や苦の作用を及ぼした全てのものを、鈍らせ変質し少しずつ衰えさせ、遂には全く消失させるに至り得る。ところが他方では、われわれの内或いは外での、認識、或いは諸観念の明晰なもしくは判明な表象の手段の使用に起因するもの〔習慣〕は全て、同一の諸印象の或いは同一の諸作用の反復によって、より多くの明瞭さ・容易さ・迅速さ、そして確かさを獲得するのである(……)<sup>23)</sup>。

魂の能動性が、或る程度、動物的生の必然性の支配領域から人間を解放し、その解放の度合いに応じて、習慣的行為や認識は、より明瞭でより確実なものとなる、とビランは語る。人間の受動性と能動性に着目し、習慣の影響のポジティブな側面を、魂の能動性の側面から解釈し提示しているわけである。

こうした分析によって、自我ないし人格は、その本質において能動性・活動性(activité)のうちにあり、それはつまり身体に作用する「力の感覚」に他ならない、と最後にビラン

21) Ibid.

22) この点については、われわれの第一論文で概ね論及済みであるので、逐一の紹介はしない。前掲拙稿「ピラニスムの成立と変容をめぐって メーヌ・ド・ビラン研究(I)」(『椋山女学園大学研究論集』, 2001.3)

23) Ibid., p. 9; 邦訳, p. 5. これに続く件でビランは、或る程度、〈それは魂の自由な活動に由来するものである〉とさらに語っている。



は語っている<sup>24)</sup>。「エネルゲイア」ないし「エルゴン」からする魂の理解といえ、アリストテレスの見解そのものであるが、ここではライブニッツの影響として哲学的には処理されている（もちろん、実体を活動性において能動性において把握する、といえ、これもまたアリストテレスの立場である。もっとも、ピランにあっては、活動性・作用性というよりも「能動性」の訳語の方が望ましい。身体的「受動性」との対比で語られているからである）。

(2)

続いてピランは第二論考、『思惟の分解』（1805年受賞）について論及する。デカルト的な形而上学的発想でも、アカデミーの基づく、コンディヤック的な論理的発想でもなく、現存の事実に基づく心理学的発想から<sup>25)</sup>、アカデミーの提起した「思惟の分解」の問題にピランは応えようとする<sup>26)</sup>。デカルトの基本的立場からすれば、思惟は単純にして分解不可能であるし、コンディヤック的立場からも単純な思惟を分解するわけにはいかないであろうが、心理学的立場からすれば思惟は分解できる、とピランは説く。それが思惟の孕む本性的二元性の問題である（この問題についてわれわれは、ピランをめぐる拙稿（第二論文）ですでに論究している<sup>27)</sup>）。

まず内的観察の或いは内感の事実の観察の限界のうちに集中するならば、原初的思惟とは、我（私、Je）」という言葉によって表現される人格的な個人の意識に他ならない。それには、区別されるが分離されない（*distincts et non séparés*）二つの要素が、本質的な二元性（*dualité essentielle*）が含まれるが、それらは、人が抽象の或いはアプリアリな体系の領域に入るために内的経験の観点の外に出ない限り、(……) 絶対的統一（*unité absolue*）に還元されることはないのである<sup>28)</sup>。

デカルト的立場からすれば分離不可能とされる思惟も、心理学的観点からすれば本質的な二元性に区別することができる、その存在の条件として分離はできないにしろ区別はできる、二つの要素に分解できる、というわけである。これはまた、自然の秩序、自然的で相対的な順序に即して論旨を展開するという意志の表明でもある。原理的に先立つものであっても、それ自体まだ検証されていない、確証されていないのであれば、まず検証され確証されているものから始め、次いでそこにおいて論理的に先行するものを求める、という手順の表明でもある。「見えるもの」と「見えないもの」という対比的表現を活用しつつ、先の引用個所に続いてピランはこう語っている。

24) Cf., *Ibid.*, p. 10.; 邦訳, p. 6.

25) 「(……) 内的経験に或いは内感の事実そのものに基づけられた、私の意見ではその本性を吟味し考察することが大切な原初的事実に基づけられた真に心理学的な意味において理解することによって、私は真剣に問題の根底に入り込んだのである」(*Ibid.*, p. 13; 邦訳, p. 9)。

26) Cf., *Ibid.*, p. 13; 邦訳, p. 9.

27) 「私が私であるための存在の二元性 メヌ・ド・ピラン研究Ⅲ」(『椋山女学園大学研究論集』, 2002.3)

28) *Ibid.*, p. 13; 邦訳, p. 9.

(……) われわれは必然的にわれわれが見ることのできない存在或いは原因を信ずる。しかし、見えざるものを把握するためには、見え得るものの観念もしくは認識をもたねばならない。そして、見えざるもの (l'invisible) が、必然的な諸存在の絶対的な或いは存在論的な順序においては、見え得るもの (le visible) よりもより先にあるとしても、見えざるものが、われわれの相対的な認識の自然的順序においては、或いは認識し信ずる能力の発展の順序においては、確かに後にあるのである<sup>29)</sup>。

分析や研究の順序としては、まず感覚的に、経験的に明示されているものから始めざるをえない、という自然的発見の順序に拠りながら、その存在論的根拠ないし原因までも射程に入れる心理学的分析の立場を表明しているわけである。経験に即しながらも、それを律し根拠づけている原因なり実体なりについても探究をないがしろにしない、というビランの立場がこの件でも明瞭に表明されている<sup>30)</sup>。

確認できない真理や信憑からではなく、最も単純で最も確かな認識から出発すべきであるということ、これはつまり、ビラン言うところの「原初的事実」から出発すべきであるということであり、その出発点の原初的事実からして二元的構成をなしている、と語っているのである。デカルト的方法意識と事実のあらがいがたさ、そのいずれにも誠実に取り組もうとするビランの方法意識の忠実な表明がここになされている、と評しえよう。「意識の統一のもとに思惟する或いは認識する主体と、思惟され或いは認識される何らかの様態とを包含する真に原初的な事実から出発すべきである<sup>31)</sup>」と、事実ビランは語っている。

(3)

続いて1806年に公募されたベルリン・アカデミーへの応募論考『直接的覚知』についての記述が来る。つまり、内的直接的覚知の存在を肯定する。しかも、それが他の受動的様態と混同されることはない、と明確に主張するとともに、主観的で能動的・活動的な側面、ないし直観や感覚との違いなどに論及する<sup>32)</sup>。

(……) この内的直接的覚知は如何なる受動的な或いは付随的な様態とも混同されることはないのである。それ故、内的覚知とは、ひとが一切の感覚や観念や知的作用から、それらにおける受動的な全てのものを、自我に内在的でない或いは自我を構成する活動から生じないもの全てを除いた時に残存するものである。それ故 (……)、人間における能動的なものと受動的なものとを、われわれにおいてわれわれに属し或いはわれ

29) *Ibid.*

30) アリストテレスの表現を借りれば、「無条件に知られているもの」ではなく、「われわれに知られているもの」から始める経験的探究の方法である。経験的分析や探究の順序、いわゆる「帰納的方法」を表明するものである。(cf. 『ニコマコス倫理学』I-4, 1095b)

校訂者バエルチは、神と人間という二つの始まりに関して、分析と総合との方法的違いを軸に、探究の順序の問題を論じている (前掲『メヌ・ド・ビラン全集 X-2』p. XIII)。

31) *Ibid.*, p. 14; 邦訳, p. 10.

32) *Ibid.*, pp. 16-17; 邦訳, pp. 12-13.

われ自身であるものと、われわれには外的で、或いはわれわれに最も近くさえあり、そこに最も内的仕方で結ばれているが、われわれでないものとを、識別することが大切である<sup>33)</sup>。

こうした能動性と受動性との峻別の立場を介して、自我の直接的覚知は、われわれの存在、実体、なかなづく原因といった普遍的で必然的な観念の起源である、と位置づけられることになる<sup>34)</sup>。

(4)

最後に、コペンハーゲン・アカデミーへの応募論考（『人間の身体的なものと精神的なものとの諸関係』、1811年受賞）にピランは言及するのだが、それは先行する諸論考の要約に過ぎない、とも語る。

この論考は、人間性の諸能力についての、これらの行使に協同する、したがって、受動的で有機的な動物的能力と能動的で知的な人間的能力とへのそれら諸能力の分割（区分）に協同する二種の原理ないし要素についての、私の以前の全ての省察と探究の要約に過ぎなかったのであるが<sup>35)</sup>。

二つの問いに整理される当該アカデミーの論題<sup>36)</sup>にメヌ・ド・ピランは、第一のものの（生理学的探究の心理学への貢献）には否定的に、第二のもの（心理学的探究の生理学への貢献）については肯定的に答えることになる。つまり、「生理学的考察や経験は、全く異なった本性の観察や経験の主題である思惟や意識の現象に対して如何なる光も投げかけることはできない……<sup>37)</sup>」と述べた後、第二の課題について、こう語ることになる。

第二の課題に関しては、内感の事実の心理学的探究や観察は、幾つかの本質的な点で身体的人間の科学を解明することが出来るし、そうでなければならないということを、その成果を示すことで確立しようとした。（……）それ故、精神的なものはある点まで身体的なものに動きを及ぼすのである。意志、魂の感受性は、諸器官が原因としての魂によって変容される限りにおいて、器官の生命的機能に対して作用し反作用するのである。けれどもこのことは、身体が精神の法則にしばしば反するそれ自体に固有の法則を常に有することを妨げはしないのである<sup>38)</sup>。

このように、内感の事実の解明が果たす科学的貢献について肯定するとともに、生理学的な解明が内感の事実の解明に繋がるかどうかについては、否定的に評価したのである（むしろ意識現象、思惟現象の特殊性を隠蔽し、生理学的一元化・曖昧化の方向へ進みが

---

33) *Ibid.*, p.16; 邦訳, p. 13.

34) *Ibid.*

35) *Ibid.*, pp. 17–18; 邦訳, p. 14.

36) *Ibid.*, p. 18; 邦訳, pp. 14–15.

37) *Ibid.*, p. 22; 邦訳, p. 18.

38) *Ibid.*, p. 23; 邦訳, pp. 19–20.

ちであること、両者の本質的な差異が見逃されてしまうことを、ビランは懸念したのである<sup>39)</sup>。

C) まとめ、あるいは『人間学新論』の執筆プラン

メヌ・ド・ビランは自身の論究の歴史を以上のように辿った後、最後に本著作の意図と構成を語る。すなわち、単一の包括的体系としては、彼の求め続けた人間の全体的科学ないしは全体的人間の科学〔人間学〕は存在しない、たとえその体系が、それぞれの領域において完全な観点ではあっても、他の領域や体系をそれで十分に説明できるわけではない、と断った後、本著作の基本的構成を述べる。それは、人間をその全体においてあるがままに理解し記述するような学問、われわれの機能や様態のすべてを含むような、受動的でも能動的でもあるわれわれのあり方すべてを包み込めるような学問の構築である、と語っている。その学問、人間の科学という学問は、なによりも自己の内的経験に忠実な学問ということになる。つまり自我をめぐる原初的事実として与えられる内的経験に基づく学問であり、三つの部門を含むと述べる<sup>40)</sup>。

論理的にはただ一人の人間のみが存在し、心理学的には唯一の自我のみが存在するにもかかわらず、これらの生ける力、或いは内的経験が区別することを教え、内感が混同することを許さないこれらの生は、ただ一つではなく三つなのである。従って私はこの著作を三つの部分に分けるであろう<sup>41)</sup>。

かくして、ビランがその晩年に構想した人間学ないし人間の科学は、三つの部門を想定したものであったことがわかる。それが、本稿の序論的部分でもすでに言及した「動物的生」「人間の生」「精神的生」という、人間の異なる「三つの生」のあり方に対応するものだったのである。それぞれの生のあり方がどういうものか、という問題にとどまらず、それらそれぞれの生が他の生とどのように関係し構造化されているかを知ること、記述することが目指されていた。まず、第一部が、動物的生を取り扱うことに触れた後<sup>42)</sup>、第二部の対象である「人間の生」について、「人間に固有の生」について、ビランはこう語っている。

第二部は、人間の固有の生に関する諸事実を含むであろう。その人間とは、感覚し思

39) *Ibid.*, p. 22; 邦訳, pp. 18-19. カパニス, ボネ, ガル, ピンヤ, それぞれの生理学的立場がいずれも否定的に評価されている。

40) Cf., アズヴィ『メヌ・ド・ビラン 人間の科学』(J. Vrin, 1995) pp. 399-402. 三つの生を取り扱う人間学は個別科学ではなく、統一の学問であること、三つの生に三つの個別科学を当てはめるべきではない、とアズヴィはビランの「人間学」を解釈している。序論でも明白なように、具体的人間の全体を、全体的人間を対象とするのが、この『人間学新論』あるいは「人間学 (anthropologie)」である。「外的人間」にかかわる生理学的視点、「内的人間」にかかわる心理学的視点、いずれの視点も包含する学問として人間学を理解している。つまり人間の二面性、二元性いずれをも含むトータルな人間像、人間の具体像を対象とする学問・科学こそが、ここで言う「人間学」なのである。

41) 前掲『全集 X-2』p. 25; 邦訳, p. 21.

42) 「第一部は、動物的生の諸現象を包含するであろう。この動物的生 (vie animale) は、今日では有機的生 (vie organique) という名称をもつ生から区別されているが、私は、両者を些かも区別しない」(*Ibid.*)。

惟する主体であり、動物的生の諸受動 (passions) に従属しているが、同時に自身の力によって自由に活動する主体でもあり、この力のみによって道徳的人格であり、つまり自我 (moi) である<sup>43)</sup>。

つまり、第二部は、人間に固有のあり方を論述する部門、人間の本質を力ないし原因として捉える立場からの人間論の展開される場所であり、そうした人間こそ、道徳的主体であり自我であるだろう、とまず予告している。そうした人間理解が、抽象的ないし旧来の形而上学的視点において展開されるのではなく、あくまで「事実」に基づく実証的レベルで、すなわち自我の「原初的事実」として、実証的事実のなかで分析され、記述されることが意図されていたわけである。この道徳的人格、自我については、上の引用文の直後に、さらに次のような記述が続いている。

〔自我とは、〕自らを認識し、他の事物を認識し、共通の原理を自我の意識のうちに或いは自我を構成する能動的力のうちに有するような、様々な知的作用を行使するものである<sup>44)</sup>。

人間を自我として構成するものがある種の能動性であり、そうした能動性に基づいてこそ様々な知的作用も実現可能であること、したがって、自我とは単に様々なものを認識する主体であるにとどまらず、そうした主体たることを何らかの形で自覚する主体、自己意識を伴った主体であるということを、この予告の段階でビランは語っているのである。

以上のような先行する二つの生の記述の後に、本著作の核心部分をなす第三の生、精神的生に言及する。これこそが最も重要な部門であり、この問題を「神秘主義」に委ねてしまうのではなく、哲学もまた自己の課題として探究すべきである、と述べた後、さらにこう語っている。

（……）この部分もまた、〈観察される諸事実〉へと帰着する（現れる）ものである。確かに感覚を超えて高められた本性、神と自己自身とを認識する精神には些かも無縁ではない高められた本性のうちで、その事実が汲み取られるにしろ、それが〈観察される諸事実〉であることに変わらない。この第三部は、……かの精神的生 (la vie spirituelle) の諸事実或いは諸様態と諸行為を包含するであろう<sup>45)</sup>。

この精神的生もまた人間性全体を支えるものとして、たとえ宗教的側面をもつにしろ、精神の有り様の一つとして位置づけられ、構造化される。探究のためのデータは、ここでもあくまでも「事実」である。経験を通して手の届く範囲内にある「事実」によって、第三の生を探究し記述しようという試みなのである。

まず、受動性としての人間の動物的生のあり方、人間の言わば条件としての動物的生の

43) *Ibid.*

44) *Ibid.*

45) *Ibid.*, p. 25; 邦訳, p. 22.



あり方を論ずる第一部、続いて、能動性としての、活動性としての人間に固有のあり方（第二の生）を論じる第二部、最後に、全面的な受動性ないしは受容性として特徴づけられる第三の生を論じる第三部、というような三部構成によって、この『人間学新論』が構想されていたことがわかる。

受動的な動物的生とは異なる意味で、高次の本性における受動性たる「精神的生」がここに描かれることになる、と予告されているわけである。

精神的生に関わる全ての能力は、〈人間にとって優越的ではあるが最も高められたその本性には無縁ではないある影響〉に対する〈純粋な受容状態〉にある人間の精神を構成している。この高次の影響は、彼の内的眼差しに顕現することによって、同時に人間の精神をその根底において、そして無限な者の理念的秩序との関係において、つまり、この仮初めの現象的世界における彼の営みの目的として、彼の教育の終極目標として、彼が垣間見る或いはつかの間に知覚するしかない、美や知的・道徳的完全性の理念との関係において、〔人間の精神を〕彼自身に明示するのである<sup>46)</sup>。……

この著作の核心部分をなすはずだった「精神的生」に関する文章を仕上げることなく、ピランは亡くなってしまう。その準備のための記された諸断章のみが、彼の日記に残されたままになる。前述したように、アズヴィ版の校訂者バエルチは、精神的生に関連するこれらの断章を再構成して『人間学新論』を公刊するという編集方針を採らず（つまり、ナヴィル版ないしティスラン版の「編集方針」を踏襲せず）、ただ現に残されている確定稿のみから、すなわち第一の生と第二の生とを論じた部門のみからなる『人間学新論』を公刊することになる。すなわち、バエルチは、「ナヴィルの取り去ったものを再度取り入れ、彼が付加したものを削除した<sup>47)</sup>」と、『人間学新論』の収録された『メーヌ・ド・ピラン全集 X-2』全体の序論部分（校訂者解説）で述べている。

われわれはやっと、『人間学新論』の本論部分を論じうるとば口まで達したが、もはや紙数も筆者の気力も尽きている。『人間学新論』の中ではついに書かれることのなかった「第三の生」、十分に展開されることのなかった「精神的生」について、つまり、最終的なピランの「全体的人間論」について、『人間学新論』ないし同時期の他の諸テキストを検討・吟味しながら論究する、というわれわれの企図については、今回のわれわれの論考の課題とし、今回はひとまずここで筆を擱きたい。

46) *Ibid.*, p. 26; 邦訳, p. 22. なお、鍵カッコ；〈〉〔〕は筆者による。

47) *Ibid.*, p. XXIV.